



シャガール「出エジプト」



ラニー姉、ルツィオ牧師と共に

工藤篤子メールマガジン37号 2003.10.10

☆9月27日、シャガール展記念コンサート☆

みなさん、お元気でいらっしゃいますか？

ハンブルクはこのところ寒い毎日です。日中は8～10度、夜は3度にまで下がります。全く真冬のようなのです。

☆9月27日、シャガール展記念コンサート☆

今回のコンサートは、ローテンブルク市とこの町のバプテスト教会が主催したシャガール展記念コンサートでした。展覧会では Exodus「出エジプト」～解放と神の守り～と称して、バプテスト教会に、シャガールの『出エジプト記による絵画』が展示されたのです。エベネゼルが、ユダヤ人救出活動を「出エジプト作戦」と呼んでいることを説明させていただきましたが、今回のシャガール展も、テーマは「出エジプト」です。

シャガールは、1955～65年にかけて、旧約聖書を題材とした絵を描きました。彼が戦後、聖書から題材を採った絵を描き始めた理由は以下の通りです。

「人々がこのような残虐行為（ホロコースト）をしたのは、聖書に書かれていることを知らないで育ったからです。もし人が聖書から、隣人を、動物を、自然をどのように愛さなければいけないかを学んでいたなら、あのような行為には決して出られなかったはずです。」

人々が聖書を進んで読まなくなってしまった今、彼は絵画を通して聖書の言うところの神の奥義と愛を訴えようとしたのです。

1957年には24枚の聖書をテーマにしたリトグラフを作成します。その後、1966年にリトグラフ集『出エジプト』が刊行されました。彼はこの『出エジプト』を、ホロコーストと重ね合わせて描いたと言います。それゆえ、モーセの時代にはなかったイスラエル国旗のダビテの星が描かれていたり、よく見ると、エジプトで苦渋をなめている民衆は、ホロコーストで苦役を負わされているユダヤ人のようであり、海を渡る民は、ホロコーストを逃れる民のようにも見えます。

（ピアニストの関節炎と主のみわざ）

その日、ピアニストのラニーは関節炎の痛みのためにピアノを弾くのが大変、という状態になりました。私たちはコンサート前、祈って主にゆだねました。

「私たちの力ではなく、あなたの力でありますように。私たちの願いではなく、あなたの願いがなりますように。」

マリア福音姉妹会の姉妹から、その日届いたカードに書かれていたこの言葉は、何とその日の私たちの祈りとなったのでした。

ラニーの力はあまり出ませんでした、その音色は実に美しいものでした。私は彼女の伴奏に合わせて声もより柔らかくなり、今までとは違った賛美となって自分でも驚きました。心配していたスピーチも、導かれるように落ち着いて話すことができました。

そして今回は、来てくださった多くのノン・クリスチャンの方から異口同音に、「あなたの輝きに感動しました。」と言われましたが、そばにいたラニーのご主人ハインリッヒは、すかさずこう答えました。「どうして彼女が輝いていたか分かりますか？それはイエス・キリストが彼女のうちに生きているからなのですよ。」まさしくその通りです。輝いていたのは私ではなく、イエス・キリストだったのです。

（シャガールの生涯）

シャガールは 1887 年旧白ロシアのヴィテブスク（現在のベラルーシ共和国）近郊のユダヤ人ゲットー（ユダヤ人隔離地区）に生まれました。両親は魚工場で働く労働者で、8 人の子供がいました。

貧しいながらも、彼はペテルスブルクの美術学校で学ぶことができ、その後、パリに出て、アカデミー・ジュリアンで学びました。ロシア革命で祖国に戻りましたが、ソビエト政権が軌道に乗るに従い、革新的な芸術は受け入れられず、ベルリンへ、そして再びパリへ戻ります。シャガールはこのパリで認められるようになります。

しかし、今度はナチス・ドイツが台頭します。そこから救出するために、ニューヨーク近代美術館が彼を招待しました。シャガールと妻ベラは 16 室しかないのに 1400 人も難民を詰め込んだ船の旅を経て、1941 年 5 月 23 日、無事ニューヨークに到着します。ドイツのロシア侵略が始まった日です。

アメリカ滞在中に最愛の妻ベラを失い、その翌年まで、彼は筆を取ることができませんでした。戦後、フランスに戻り、南仏を拠点に活躍。シュールレアリストとして、その名声を不動のものにしました。

1985 年、97 歳で死去。一世紀を生きた彼は、2 度の亡命を経験、その過酷な経験からモチーフを取りました。ハシディズム（ユダヤ教敬虔神秘主義）の家庭の中で育った彼は、シャバット（安息日）や祭りの色彩、踊り、喜びが、絵の色彩の基調になっています。

☆イスラム教徒の回心（インドネシア）☆

ところで、ピアニストのラニーは中国系インドネシア人です。彼女から、今インドネシアでは、たくさんのイスラム教徒がキリストの信仰に入っていると知らされました。

イエス・キリストのことを、アラブ語でイザ・アルマスィールと言います。イスラムの世界では、「バルナバの福音」というのが信じられています。

このバルナバは、「使徒の働き」に出てくるバルナバではなく、13 世紀に生きた人で、イタリア語の福音書を

書きました。そこにはイエス・キリストは十字架にかかって死んだのではなく、ごく普通に老死したと書かれています。またインドに伝道に行ったという説もあります。イスラム教の多くは、この「バルナバの福音」のイザ・アルマシールのことしか知りません。

インドネシアでは、イスラム教徒がこれまでたくさんの教会に放火したり、キリスト教徒を迫害してきました。しかし、何の復讐もせず、それどころか益々イスラム教徒のために祈るクリスチャンを見て、たくさんのイスラム教徒がキリスト教徒の信仰と愛に驚き、十字架にかかって自分の罪のために死んでくださった真のイザ・アルマシールを知って、その信仰に立ち返っているそうです。

ジャカルタにはイスラム教からの回心者のみによる教会があります。今では、救われる人がどんどん起こされて、数千人の教会に成長しているそうです。迫害のあるところに、神はこのような素晴らしいみわざをなしてくださっています。

♪お祈り下さい♪

明日、11日、ハンブルク日本語教会主催の“Come To Me”コンサートのために。

ハンブルク日本語教会は小さな群ですが、実にたくさんの音楽家に恵まれています。ヴァイオリニストでもある河村牧師をはじめ、ピアニストの Riedel 立子さん、長年こちらで歌の先生をしておられるソプラノの小倉範子さん、フルーティストの池ノ谷洋光さん、オルガニストの堀端孝子さん、駐在員の立場ですがギターのお上手な坂本高志さん、などです。

皆さん総出のコンサートの予定だったのですが、河村先生が指を痛めてヴァイオリンを弾くことができなくなりました。急ぎょ、私のドイツ人教会の音楽伝道師をしているサリーが助けてくれることになりました。主の備えに感謝します。

主がコンサートを通して栄光を現してくださいますように、また、タイトル通り、主が多くの方を救いに招いてくださるようお祈りください。

15日に日本に到着します。日本での賛美伝道活動のためにお祈り下さい。

どうぞ祝された週末を！

シャローム

工藤篤子



【チャリティーコンサートのお知らせ】

ルーマニア孤児支援

日時： 11月21日（金） 午後6時半より

場所： VIP 関西センター 9F チャペル

入場料： 1500円

詳しくは事務局までお問い合わせください。